

今日の説教のポイント<エフェソの信徒への手紙 2 章 14~22 節>

①現代のイスラエルがパレスチナにしていることを批判していたが。

「敵意という隔ての壁」(14)と聞くと、イスラエルのヨルダン川西岸地区の壁を思います。「あれだけひどい迫害を受けたユダヤ人が、なぜパレスチナの人々に同じようなことを行うのか」、とこれまで非難気味に考えて来ました。しかし、ドイツがシリアの難民を受け入れようとする背景に、第二次大戦後、ドイツ領だった所から数百万人にも上る引揚者が帰って来たり、ベルリンの壁崩壊後にも東ドイツから西ドイツへの移住者を受け入れた経験があるから、と聞いた時にはっとしました。ユダヤ人は2千年に亘って迫害を受け続けて来たのです。その長きに亘って受け続けて来た体験が、「安心して生きていける自分たちの国を持ちたい」という思いを生んでいるのです。だとすると、責められるべきは彼らだけではなく、彼らをそのようにさせてしまった者にも責任があるのではないのでしょうか。人を責めることができるかという問題です。

②どちらが正しいかを問題とするのではなく、神の家族へ向かう思想

イエス様が「規則と戒律ずくめの律法を廃棄された」(15)のはこのことと関係しています。規則と戒律に代わってイエス様が差し出して下さったもの、それは主御自身が罪人のために十字架にかかれたことです。このことから、律法は、相手より自分が正しいと誇ったり相手の粗捜しをするために用いるものではなく、むしろ自分の罪を知らされるものであり、それと同時に、その罪が主にあつて赦されたことを感謝して、相手をも赦してして共に生きていく者となるために与えられたものなのです。17 節までは過去形でイエス様が十字架にかかって下さったことを語り、18 節からは現在形で全ての者が一つとなり「神の家族」(19)となることが語られて行くのはこのためです。

魯迅が高く評価したドイツの女性版画家ケーテ・コルヴィッツもこう語っています。「平和主義を単なる反戦と考えてはなりません。それは一つの新しい思想、人類を同胞としてみるところの理想なのです」



「死んだわが子を抱いている母」